２００９年　大学は美味しいフェア

昨年に引き続き大学は美味しいフェアに広報室の人たちと行ってきた。

小学館主催で、場所は昨年と同じ、高島屋新宿店。２７の大学がそれぞれ「大学ブランド」と銘うった品物を販売すると言う催し。今回は、ちょうど東京出張中の学長も見学にこられた。

今年は、バラフを中心にして、新しくできたバラフアイスクリームを加えての販売。在京のＴＶ局数社が番組で取り上げたり、朝日新聞の首都圏版がこのフェアーのことを紹介し、バラフの写真を掲載していたせいか「ああ、これこれ」とか「テレビでやってた野菜でしょう」とお客さんたちはバラフを目指してやってくる。「不思議な野菜ねえ」「こんな味は初めて」「塩をまぶしてるんですか」「なぜ、大学はこの野菜を開発したの」など、昨年とは少し違う質問を受ける。一人ひとりに、なぜ大学がこの植物の野菜化に着目したのかなどを説明。味をつけているのかと多くの人が言う質問には、この野菜そのものが持っているもので、ゴマの味がするルッコラと同じようなものだと説明すると分かってもらえた。

連日大好評だった“バラフ”と“バラフアイス”

初日は３時には完売。翌日は倍の量を用意した。多くの大学は東京で雇った売り子さんだけで販売をしている。質問をしても「・・・・」と言う所もあったが、今年、初参加の御茶ノ水大学や奈良女子大などはおそろいのバンダナを巻いた女子学生たちが元気よく販売をしていた。昨年にはなかった風景。佐賀大学も経済学部や農学部の学生たちにこの体験をしてもらえばよかったのにとつくづく思った。というのも、今回は東京で雇ったベテランの(と言っても若い)売り子さんがいて、手際がよくさばいてくれるし、レジも近くなったせいで、昨年の大混乱と大違いで、私達は説明と試食に専念すればよく、逆にお客さん達を観察する余裕があった。

成人の男性が試食をする。当たり前そうだが、以外と佐賀ではあまり見かけない風景。夫婦で来ても妻は手を出すが、夫の方は妻に進められてようやく口にする。わが夫もそう。しかし、夫婦連れでは、買っていくかどうかを決定するのに、夫の意見が尊重されていることが多いのは以外だった。多様な服装をした人たち。男性同士の二人組みでやってくる人も多い、若い人パパも、もちろんおじいちゃんも、おばあちゃんも、みんな試食をしていく。そしてはっきりと意見を言い、質問をする。「家に帰りつくまで、二時間以上あるから保冷剤もたっぷり入れてね」の指示を売り子さんから受ける。そのせいか、アイスクリームをここで食べるという人の多いこと。多いこと。一昨日（6月28日）行った三日月町の「たまご屋」で「ソフトクリーム6個。持って帰る。」「ソフトクリームを持って帰る！！」と耳を傾けていると「帰り着くまで30分」というおじさんの言葉を聞いて、あらためて都会と佐賀の家までの移動時間の違いを思った。

夕方の 5 時過ぎになっても、7 時近くなっても次から次にお客さんが来る。この時間になると少々疲れてきて「まだ来てるよ」と皆でつぶやく。人口の多さを実感。

翌日は、今年人気の九大のコーナーでは開店と同時に行列。佐大にもお客さんがやってくる。嬉しい半面、信じられないと言うのが正直な気持ち。

全ブースを回ったが、他大学の品物は昨年の方が購買意欲をそそられた。買い物客として「食べてみよう、買ってみよう」と思うものが少なかった。地場の特産物を健康食品にした物が多かった。

新しい動きもあった。九大の先生の発案で、情報交換の場がもたれたこと。突然の案内のため参加できなかったが、面白い話を聞けたのではと残念だった。

本当に学生達を参加させるべきだと思った。

出張で東京に来ていた長谷川照学長も飛び入りで応援

フェアが終わって１週間後在京のラジオ放送がこのイベントのことを取り上げていた。昨日(6 月 29 日)の佐賀新聞でも共同通信が配信した記事が掲載されていたが、バラフのことが取り上げられていた。マスコミの注目度もあがっているようだ。

「塩味は血圧に悪いでしょう」「この野菜は、体のためにいい成分が入っているの」と言う質問も多く、食物に求められているのは「健康、安心、安全」だとあらためて感じた。そういう意味では、バラフの販売資料にもう一工夫がいるのではと思った。